

第 4 回 御室・法金剛院

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 小松武彦

- 1 御室について
- 2 法金剛院の概要
- 3 法金剛院の発掘調査
 - ・池西岸部の調査
 - ・滝の調査
 - ・塔の調査
 - ・門の調査
- ・西京極大路の調査と池東岸部（御所）の調査
- 4 法金剛院の復元

参考文献

森 蘊『寝殿造系の立地的考察 奈良国立文化財研究所学報十周年記念学報（第十三冊）』1962

森 蘊「法金剛院の庭園について」『建築史』第 1 巻第 1・2 号 1939

森 蘊『庭ひとすじ』学生社 1973

杉山 信三「仁和寺の院家建築」『院家建築の研究』吉川弘文館 1981

『京都府埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育庁文化財保護課 1969

「京都の庭園 遺跡にみる平安時代の庭園」『京都市文化財ボックス第 5 集』京都市文化観光局文化局文化財保護課 1990

『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局 1987

小松武彦「法金剛院境内」『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997

小松武彦 吉村正親 小檜山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成 8 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998

小松武彦「法金剛院境内」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999

『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999

『中右記』（藤原宗忠の日記）

『長秋記』（源師時の日記）

清水 擴『平安時代仏教建築史の研究 浄土教建築を中心に』中央公論美術出版 1993

太田 静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987

角田 文衛『待賢門院璋子の生涯 椒庭秘抄』朝日選書 1985

御室は、仁和寺の呼名で、仁和寺周辺の表す地名でもある。その由来は、延喜四年（904）、宇多天皇が出家して寺院内に「御室（御所）」とよばれる僧房を建て住んだことからきている。宇多天皇は法皇となり、門跡（住職）を務める。これ以降も、皇族が門跡を務め、門跡寺院として高い地位を保っていく。

さらに、仁和寺の周辺に天皇・皇族や貴族達が付属する子院（院家）を建立し、最盛期には 78 の子院があったと言われている。その中の一つに、待賢門院（藤原璋子）が建立した法金剛院がある。

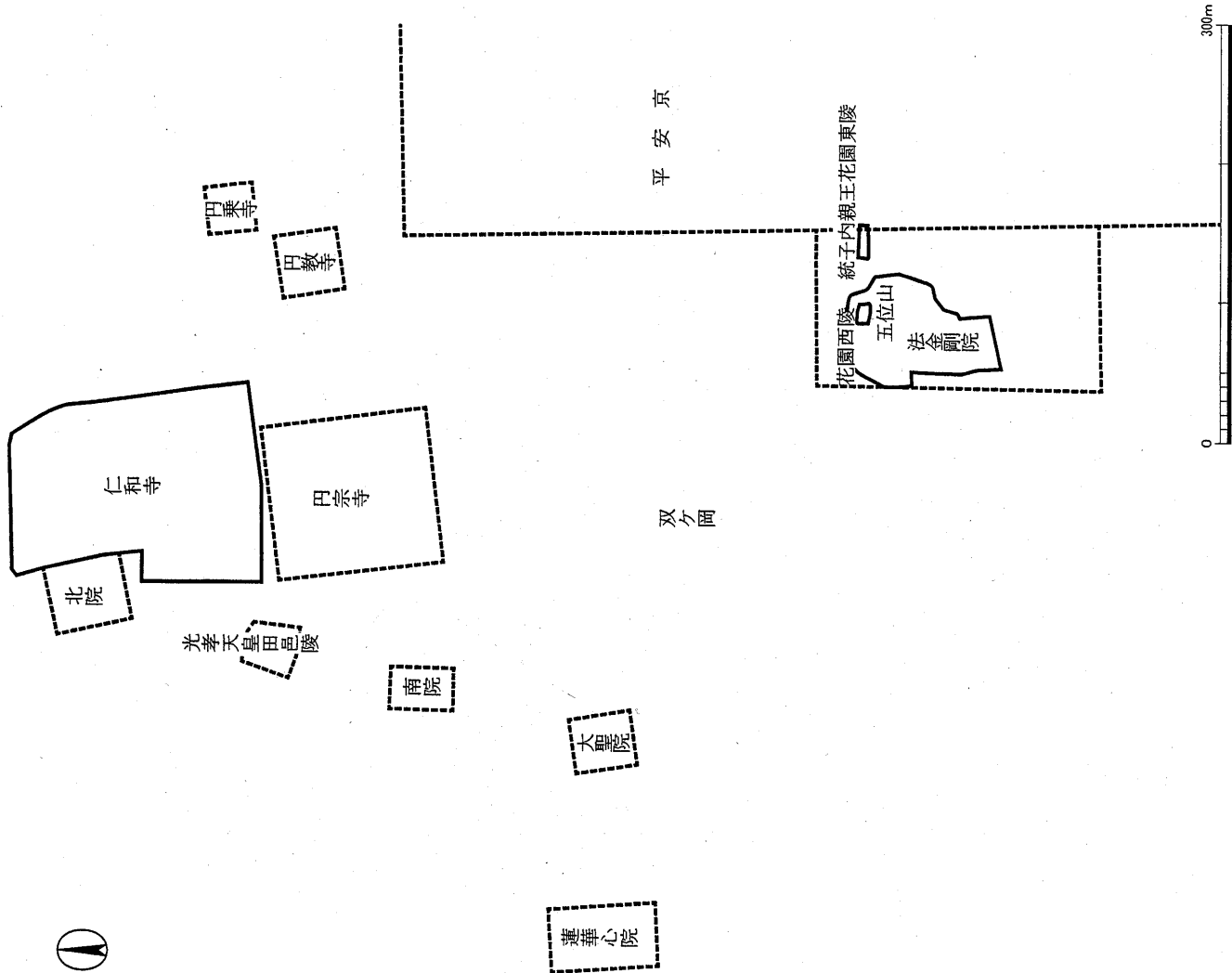


図 1 御室仁和寺周辺地図

2 法金剛院の概要

法金剛院は双ヶ岡の東麓に位置する。双ヶ岡は、平安時代初期から平安京近郊の景勝地として山荘な
どが造営されたところである。

天長七年（830）双ヶ岡東麓に、右大臣清原夏野の山荘が造られた。この山荘には、たびたび天皇が行
幸した記録があり、承和十四年（847）に仁明天皇が双ヶ岡の東の小高い岡に訪れ、ここからの景色を
めた時に、この岡に従五位下の位を授けたのが五位山である。

夏野の死後、この山荘は雙丘寺となる。さらに、文徳天皇によって御願寺として天安寺に改められるが、
大治年間には廃寺となっていた。

この地に大治四年（1129）九月、鳥羽天皇の中宮であった待賢門院が御所と御堂の建立することになる。
当初は、仁和寺周辺に三箇所の候補地があげられていたが、論議の末に、天安寺跡地が地形的に優れ
ていることで選ばれた。翌年、大治五年（1130）十月には法金剛院として供養が行われた。

造営は、播磨守藤原基隆が請け負う。作庭は、仁和寺の僧徳大寺法眼静意が設計する。滝は、伊勢房
林賢が造る。

御所、御堂、池、滝

造営の様子は、『中右記』大治五年（1130）十月二十九日条に、「今夕雨院初渡法金剛院御所、予不騎馬、蜜々
秉燭之間早参彼御所、入御東御門、水火童立中門、火北、水南、判官代朝隆親隆二人付頗雖雪下、自
南庭西行、昇自神殿南階、入御簾中、仍東對代南庇西一間供御座、南廣庇敷高麗端一行、此亭本昔天安
寺舊跡云々、掘大池、西作御堂、大門西面、池東作御所、御門東面、造營ノ體、大略一町宅、過差美麗也」

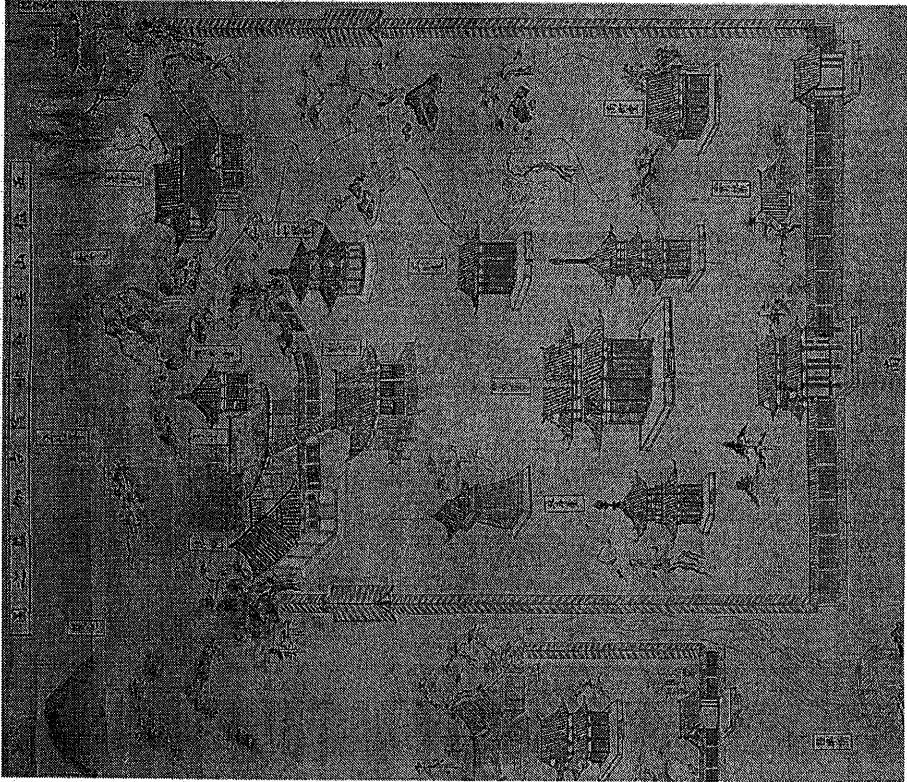


図2 法金剛院古伽藍之図（法金剛院蔵）

と『長秋記』同年十一月一日の条にも、「晴、辰時参院庭雪尚不消、寒気殊甚、兩院可還御他、入自東
門之間、侍臣等着深下立、皆布衣他、随分折花、御車二兩、自御所渡御々堂、經御覽、此間、北廊縁
上参會卿相群居、千時瀧傍立黄花札、林賢法師哥他」とある。

創建当初は中央に大池を掘り、池を挟んで西に御堂と大門、東には御所と御門が造られ、その規模
は一町ほどとある。また、寝殿、東對、中門、南庭と北廊の記述から寝殿造建物の構成であることが
判る。その後も造営は継続される。

滝の改修 新御所

長承二年（1133）に瀧の改修が行われる。当初の庭を造ったのは静意で、瀧を造ったのは林賢であっ
たが、瀧は『長秋記』長承二年（1133）九月十四日の条に、「女院御覽瀧、乗御船、又渡御々堂、召得
大寺法眼、瀧事可令感之由有仰、仍遣召、其次瀧今五六尺許上高之由示合、申可安之由」とあり、待
賢門院の命で静意によってさらに、五・六尺（1.5㍉1.8 m）高く造り変えられる。

北斗堂

『長秋記』長承四年（1135）三月二十七日の条に、「件御堂有北東御所北」とあり、御所の北に位置
している。北斗堂 檜皮葺一間四面

塔、経蔵

『中右記』保延二年（1136）十月十五日の条に、「午下参法金剛院着直衣本御堂南垣外東向立御塔、
其西立経蔵、四面有回廊」とあり、塔は御所の南で当初の境内外に建てられた。経蔵は塔に西に位置
している。この時点に、一町規模の寺域が南側の春日小路まで拡張される。

南御堂、三昧堂

南御堂は、『百鍊抄』保延五年（1139）三月二十二日の条に、「待賢門院供養仁和寺御堂法金剛院東、
左衛門権佐親隆造進之」とあり、院の東と記されている。

三昧堂は保延五年（1139）に建立されているが位置についての記述はない。

待賢門院が崩御された久安元年（1145）の『台記』八月二十三日の条に、「待賢門院先棺、次幸仁和
寺三昧堂、其儀如生存、但群臣歩行、即安置石穴云々、西方当大将军王相方云々、然依遺言、猶俸渡
云々、有議定云々」とあり、遺言によって遺体は三昧堂の石室に安置された。室町時代の文明元年（1469）
に五位山の東、現在の御陵付近で墓所が発見された記録が仁和寺に残されている。

承安元年（1171）には待賢門院が崩御の後、娘上西門院統子が院を引き継ぐ。

東御堂

東御堂は、『百鍊抄』承安元年（1171）十月八日の条に、「上西門院供養法金剛院内小御堂、太上法皇・
建春門院行幸、守覚法親王為導師巽角傍池畔」とあり、東南で池のほとりの位置に建てられた。東御
堂 檜皮葺一間四面

この時が、堂塔が建ちならび最盛期を迎える。しかし、治承五年（1181）、御所の火災あり、徐々に
衰退していく。鎌倉時代中頃に円覚上人が融通念仏を広め再興されるが、再び室町時代には応仁の乱
以降、堂塔は失われ、園池は水田へ転化され縮小していく。現在は、五位山を含めた境内には清女の
滝が往時を偲ぶ姿をとどめており、京都市内に残る唯一の浄土庭園である。

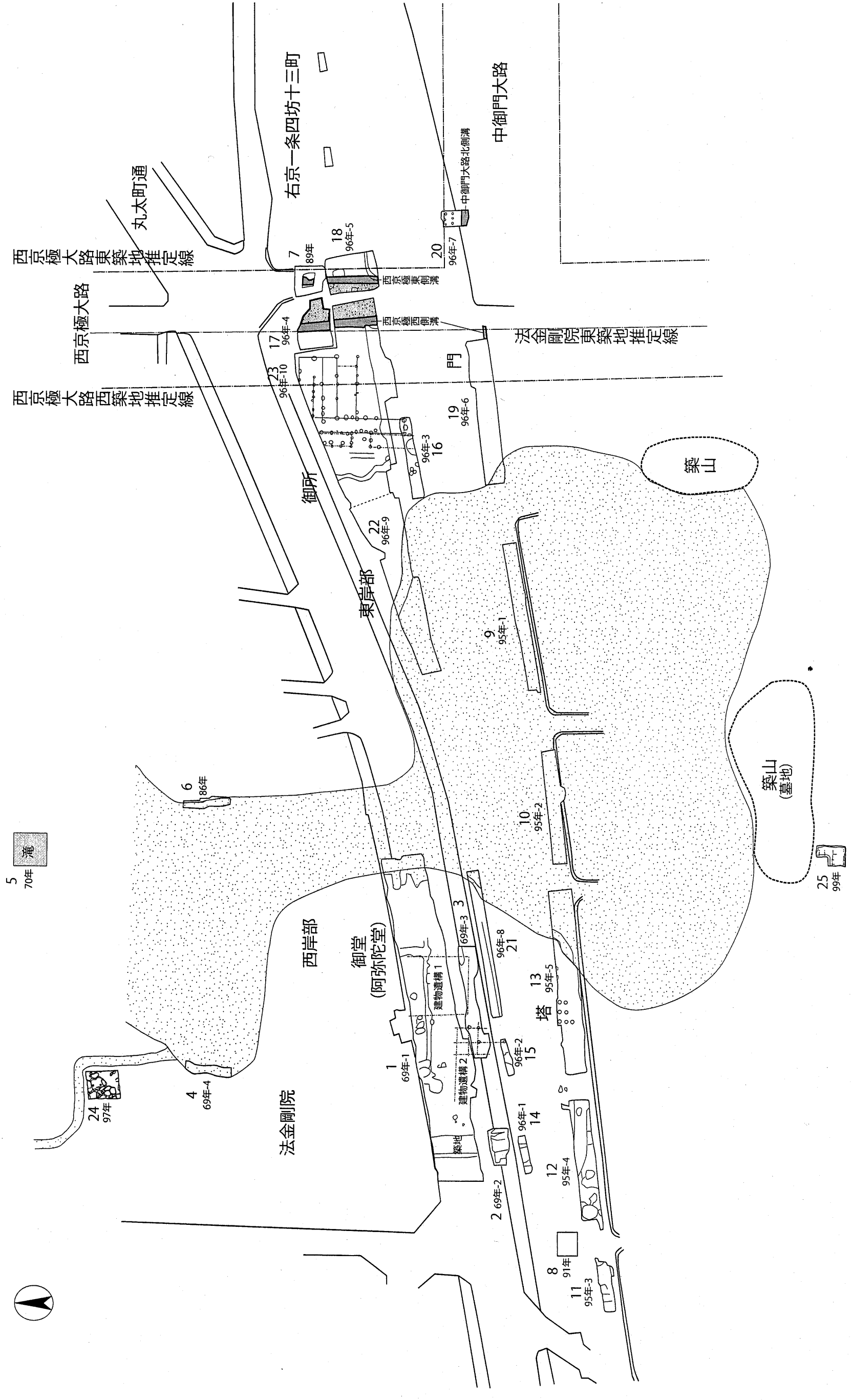


图3 法金剛院 調査地点図

3 法金剛院の発掘調査

現在の法金剛院は、JR 花園駅北西の京都市右京区花園扇野町にあり、北は五位山、西は西ノ川、南は丸太町通に囲まれた位置にある。

法金剛院の庭園遺跡に早くから着目されたのが森蘊氏で、1939 年に法金剛院の庭園についての論文が出される。次いで、杉山信三氏によって『仁和寺の院家建築』の中で建物について文献の研究がなされる。

調査は、森蘊氏が1959年に境内から花園駅周辺の旧境内までの一帯を地形測量行う。さらに翌年には、滝口の周辺を牛川善幸氏によって電気探査が行われる。

法金剛院での発掘調査は、丸太町通の拡張に伴い、境内の南側が削られることになったため、1968～69年に、京都府教育委員会が丸太町通などで実施したのが最初である。

翌、1970年には庭園文化研究所が境内の整備地業に伴い、滝周辺の調査を行う。

その後、断片的な調査は行われていたが、JR 山陰本線（嵯峨野線）の立体交差化に伴う花園駅周辺の再開発が計画されたため、1995～96年にかけて調査を実施した。

池西岸部の調査（丸太町通・境内）
（図3－1～4）

丸太町通での調査では、御堂に関連した遺構・池の汀が検出されている。

建物跡は東西幅15 m、南北幅15 m以上の南北棟である。池西岸の汀線は9 mにわたって検出された。

境内での調査では、池の北西岸の汀線が検出された。

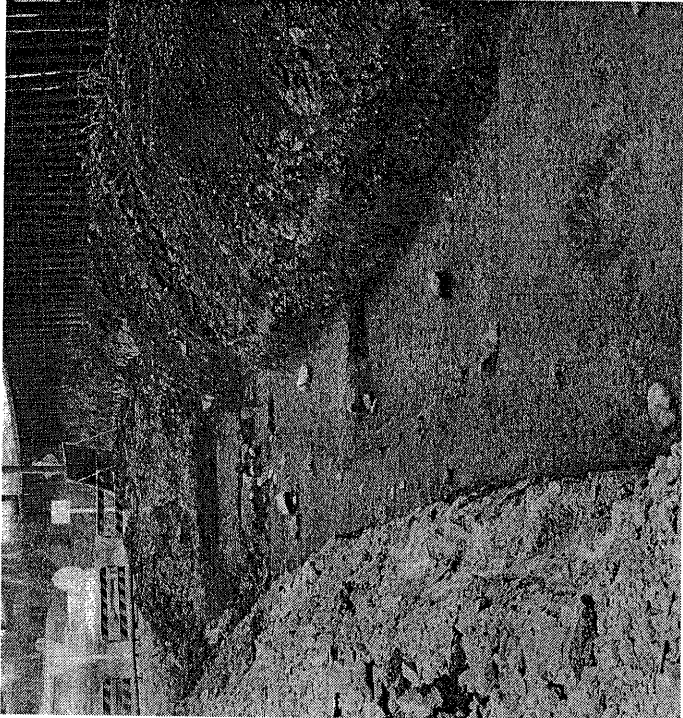


図4 池の汀（京都府文化財保護課提供）

滝の調査（図3－5）

滝石組は調査当初、地上には2石しか見えていなかったが、その下層で3 m大の石が3石と水受石が検出された。滝石組の高さが約5 mであることが判明した。また、滝壺から池へ水を誘導する遣水も検出された。遣水の幅は約2 mである。



図5 整備前の清女滝（庭園文化研究所提供）

No.	年度	調査機関	内 容	所在地
1	1969年-1	京都府教育委員会	建物、築地遺構、池の西汀	調査地（右京区）
2	1969年-2	京都府教育委員会	築地遺構	花園扇野町（丸太町通）
3	1969年-3	京都府教育委員会	建物	花園扇野町（丸太町通）
4	1969年-4	京都府教育委員会	池の西汀	花園扇野町（法金剛院境内）
5	1970年	庭園文化研究所	清女の滝と水受石、遣水	花園扇野町（法金剛院境内）
6	1986年	京都市埋蔵文化財研究所	南北方向の池の東側護岸施設	花園扇野町
7	1989年	京都市埋蔵文化財研究所	平安後期の南北方向溝	花園寺ノ内町
8	1991年	京都市埋蔵文化財研究所	耕作土	花園扇野町
9	1995年-1	京都市埋蔵文化財研究所	池の石敷	花園寺ノ内町
10	1995年-2	京都市埋蔵文化財研究所	池内	花園寺ノ内町
11	1995年-3	京都市埋蔵文化財研究所	ピット	花園扇野町
12	1995年-4	京都市埋蔵文化財研究所	取水の東西溝、瓦経出土	花園扇野町
13	1995年-5	京都市埋蔵文化財研究所	塔、池の西汀、下層建物、溝、流路	花園扇野町、寺ノ内町
14	1996年-1	京都市埋蔵文化財研究所	築地	花園扇野町
15	1996年-2	京都市埋蔵文化財研究所	建物	花園扇野町
16	1996年-3	京都市埋蔵文化財研究所	中門、室町の井戸	花園寺ノ内町
17	1996年-4	京都市埋蔵文化財研究所	西京極大路路面、西側溝、平安時代前期の建物、中期の井戸	花園寺ノ内町
18	1996年-5	京都市埋蔵文化財研究所	西京極大路路面、東側溝、下層流路	花園寺ノ内町
19	1996年-6	京都市埋蔵文化財研究所	東門の地業、西京極大路西側溝、池の東汀、下層流路	花園寺ノ内町
20	1996年-7	京都市埋蔵文化財研究所	中御門大路北築地、北側溝	花園寺ノ内町
21	1996年-8	京都市埋蔵文化財研究所	池の西汀、下層平安時代前期の地業	花園扇野町
22	1996年-9	京都市埋蔵文化財研究所	池の東汀	花園寺ノ内町
23	1996年-10	京都市埋蔵文化財研究所	西京極大路路面、西側溝、建物、中門廊、遣水	花園寺ノ内町
24	1997年	京都市埋蔵文化財研究所	土取穴	花園扇野町（法金剛院境内）
25	1999年	京都市埋蔵文化財研究所	建物の地業	花園扇野町

図6 発掘調査中の清女滝（庭園文化研究所提供）

塔の調査 (図3-13)

JR山陰本線南側での調査、塔跡・池の西岸が検出された。

塔跡は、基壇上に礎石2基と礎石据付け穴4基が検出された。南北2間、東西2間分である。柱寸法は南北が南から1.5m、1.8m、1.8m、東西は西から1.8m、1.5mで、一辺4.8m規模の礎石建物であることが明らかになった。洲浜は北東から南西方向の汀を16mの範囲で検出した。

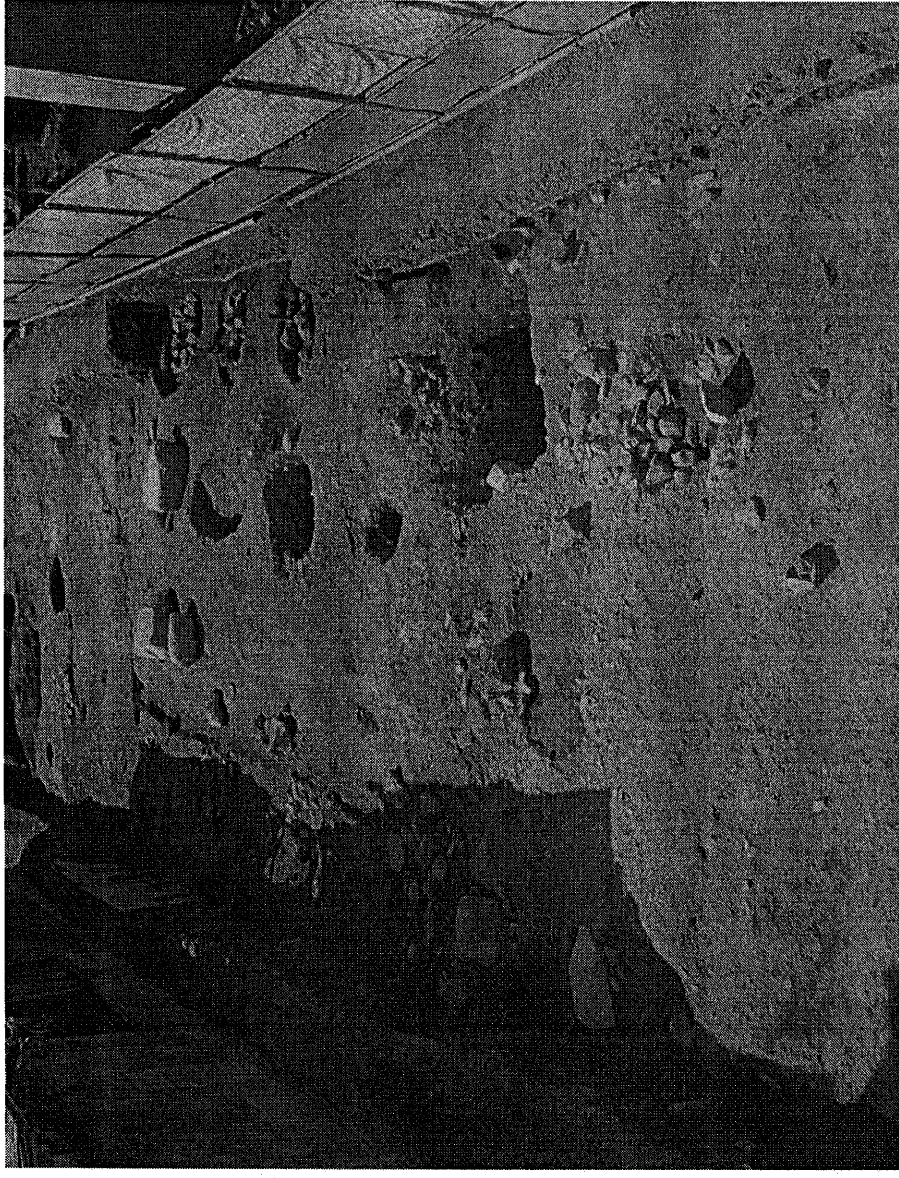


図7 塔・洲浜 (東から)

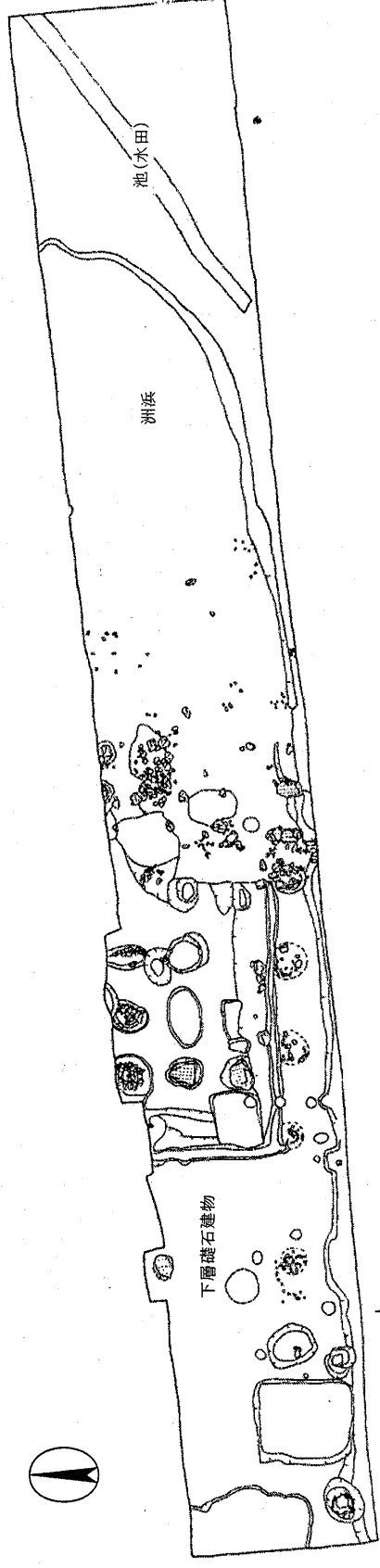


図8 塔・洲浜平面図

門の調査 (図3-19)

花園駅南側の調査で、門の地業が西京極大路と中御門大路の交差点の道路敷内で検出された。

地業は旧流路を埋めて造られているため、粘質土や小石混り土を用い、特に門の建物に当たる部では、東西1.8m、南北1.5mの範囲で両端に拳大の石を東西に並べ小区画化し、その単位ごとに固く叩き締められている。版築状の積土は10層にもおよび、その厚さは1.3m以上である。

地業の東端には、さらに南北に河原石を3〜4段に積み、区画の縁取がされている。最下部には部的に河原石を粗く詰めている。

地業の東端で南北溝が検出された。西京極大路西側溝と考えられ、法金剛院の東限が西京極大路内にはみ出していることになる。

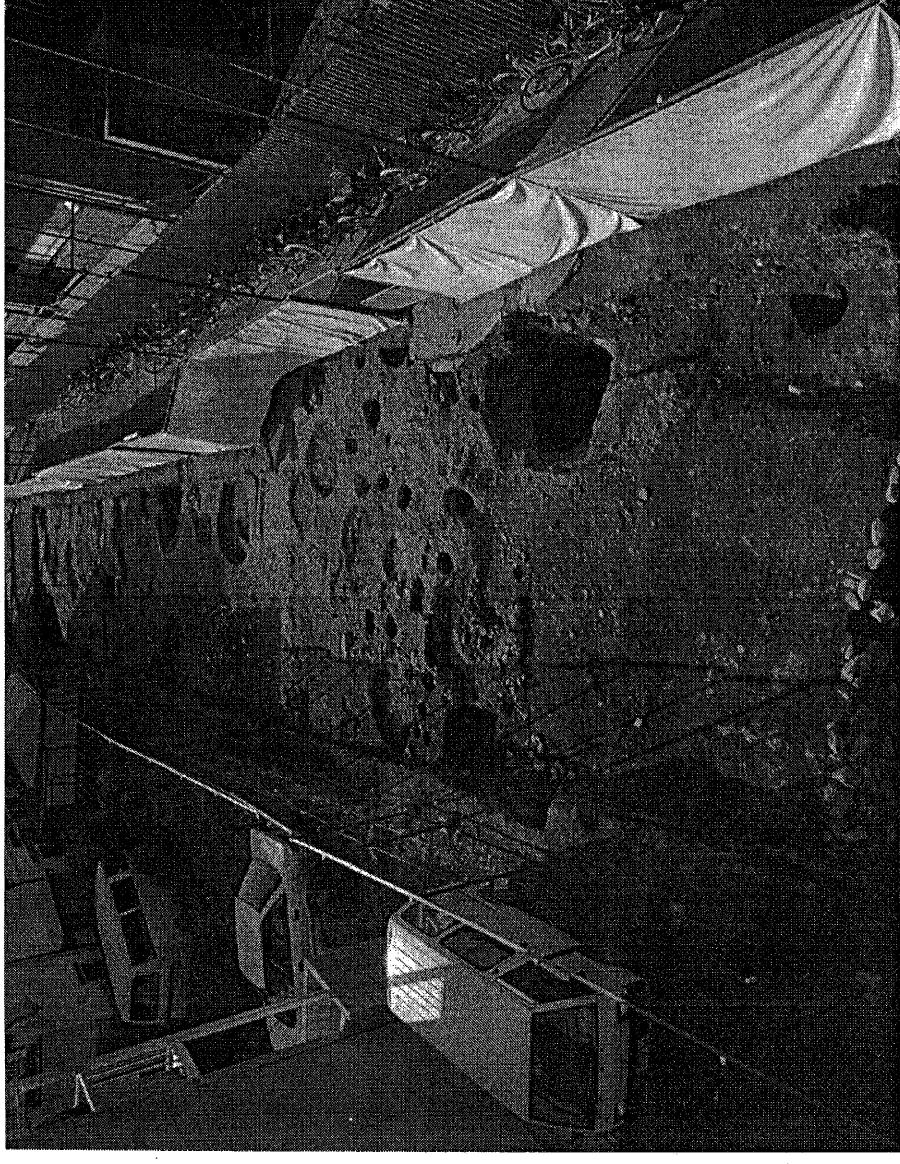


図9 門地業 (東から)

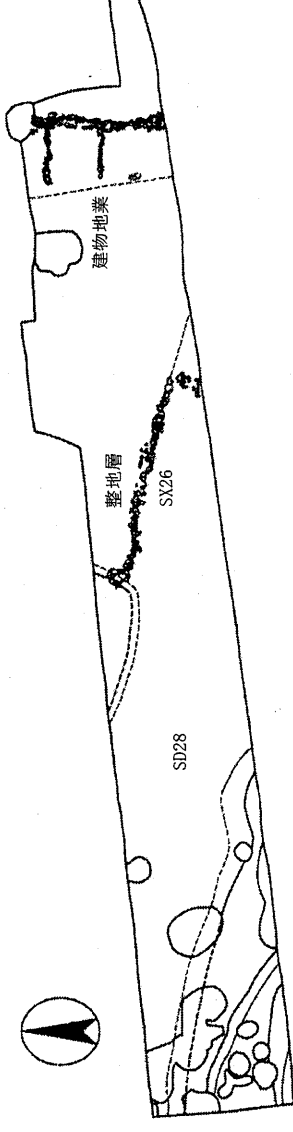


図10 門地業平面図

西京極大路と池東岸部（御所）の調査（図3-7・16～18・22・23）

花園駅北側の調査で、西京極大路路面、東・西側溝と法金剛院の御所の建物、東築地、池の東岸が検出された。

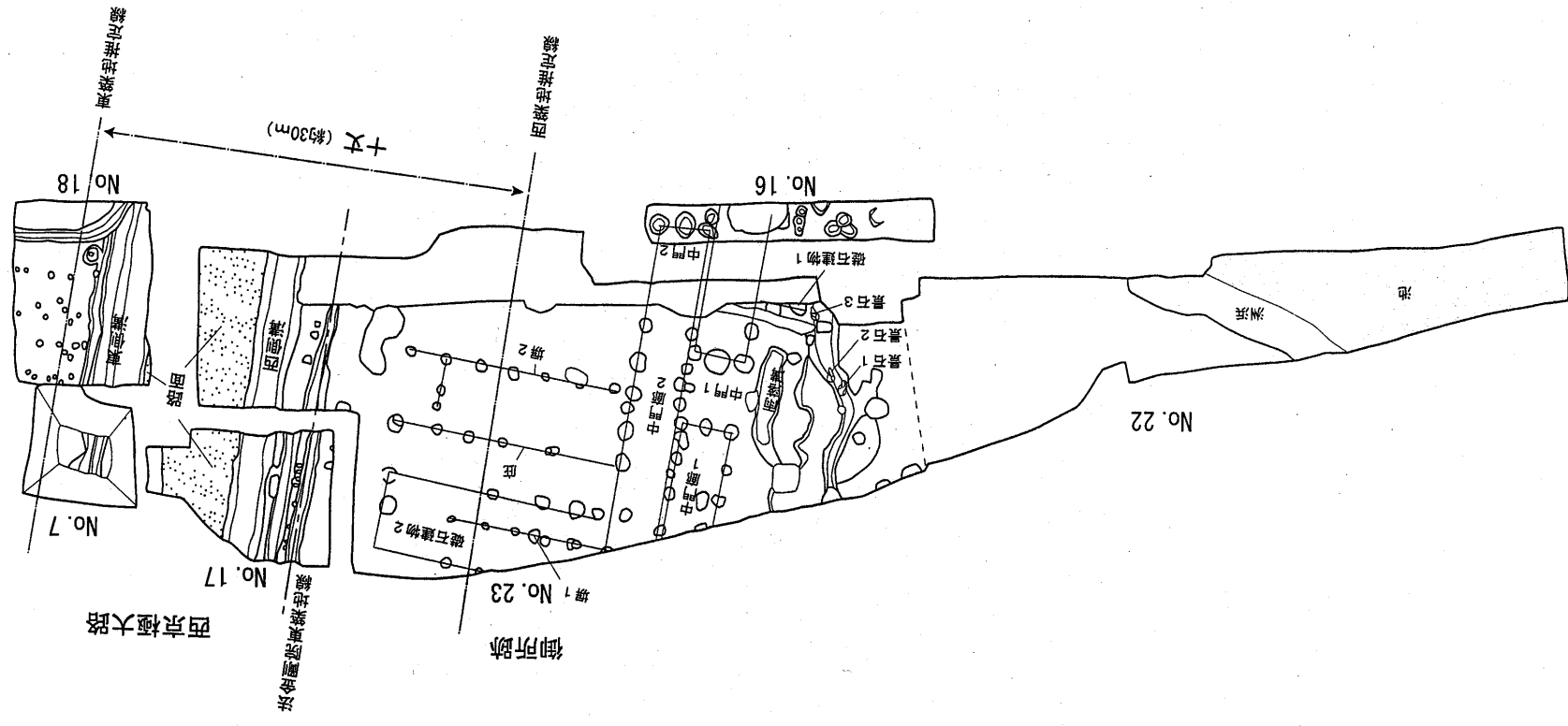


图 11 西京極大路・御所・池東岸平面图

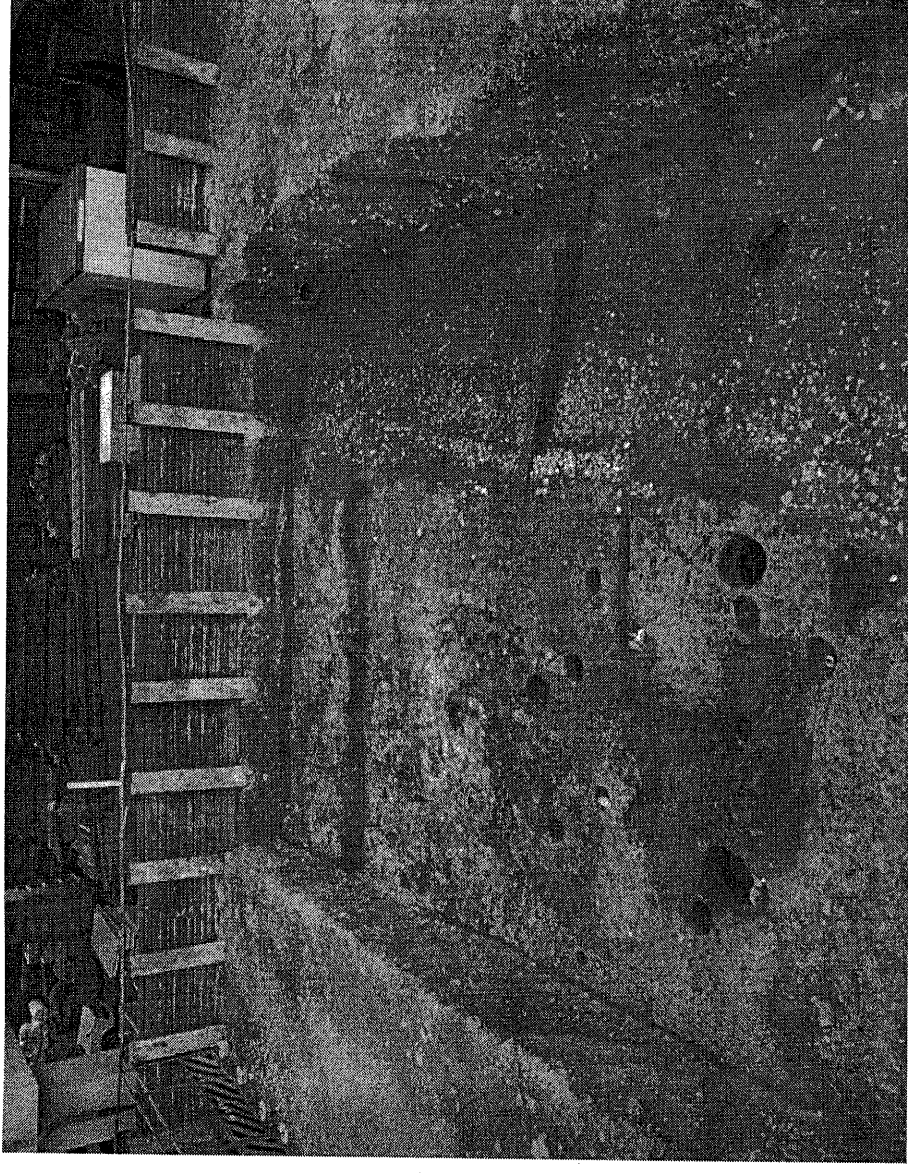


図12 西京極大路東側溝（北から） 図3-18

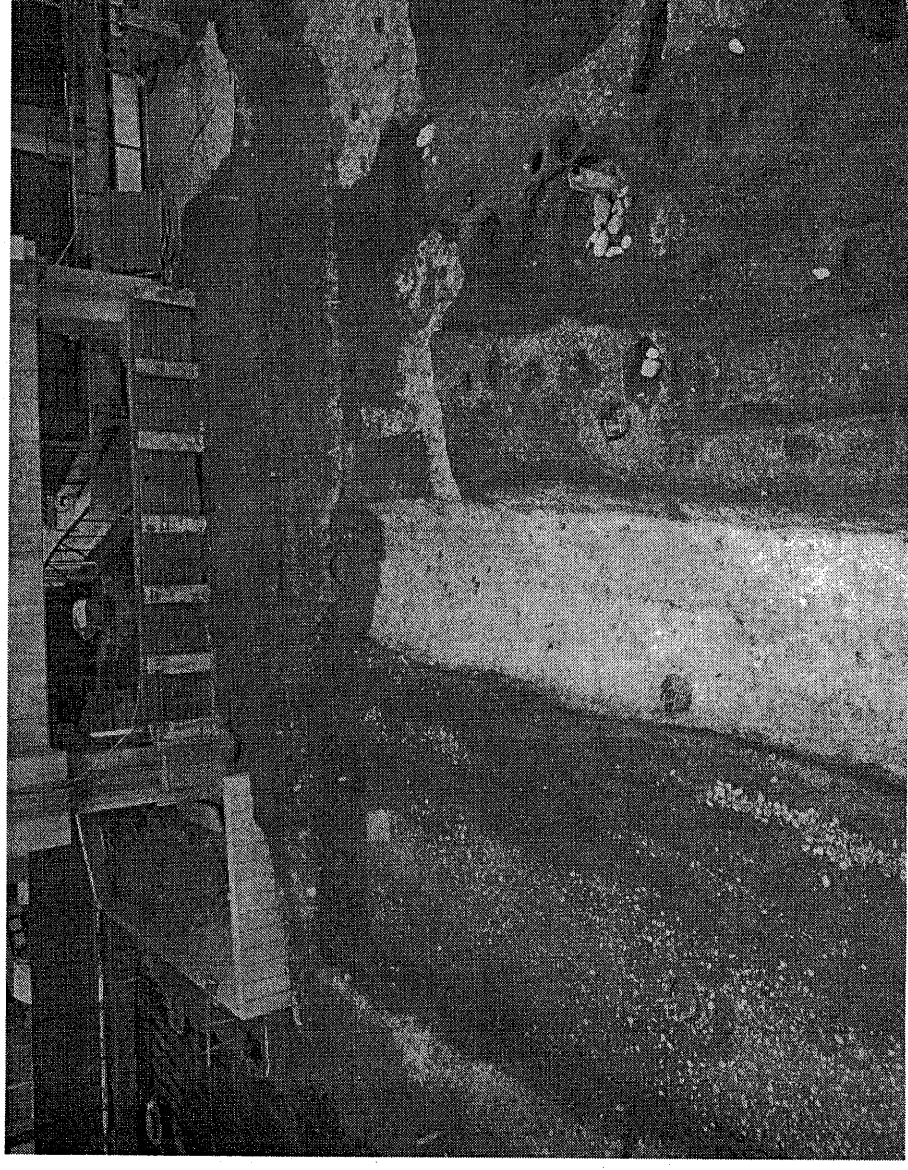


図13 西京極大路西側溝・路面・築地（北から） 図3-23



図 14 池東岸（南東から）図 3-22

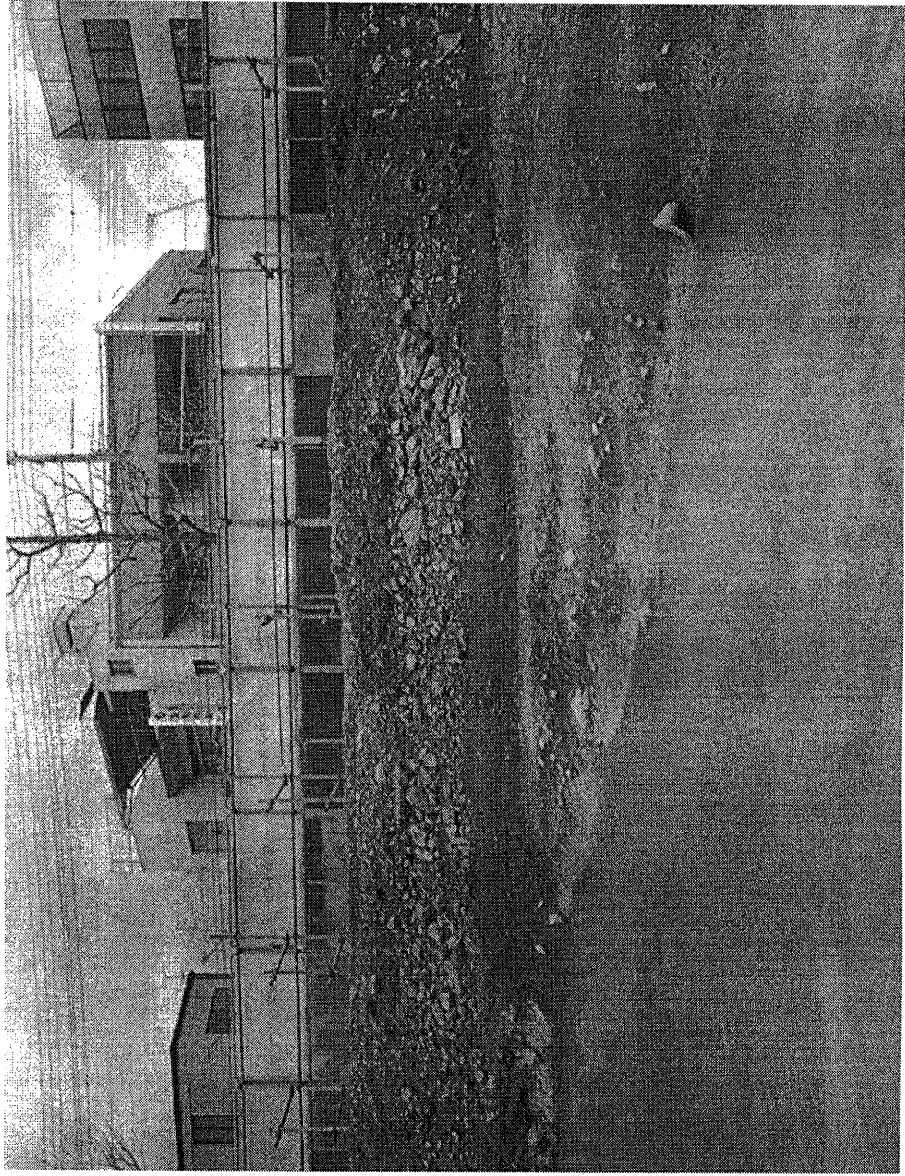


図 15 水を張った池東岸（南から）図 3-22

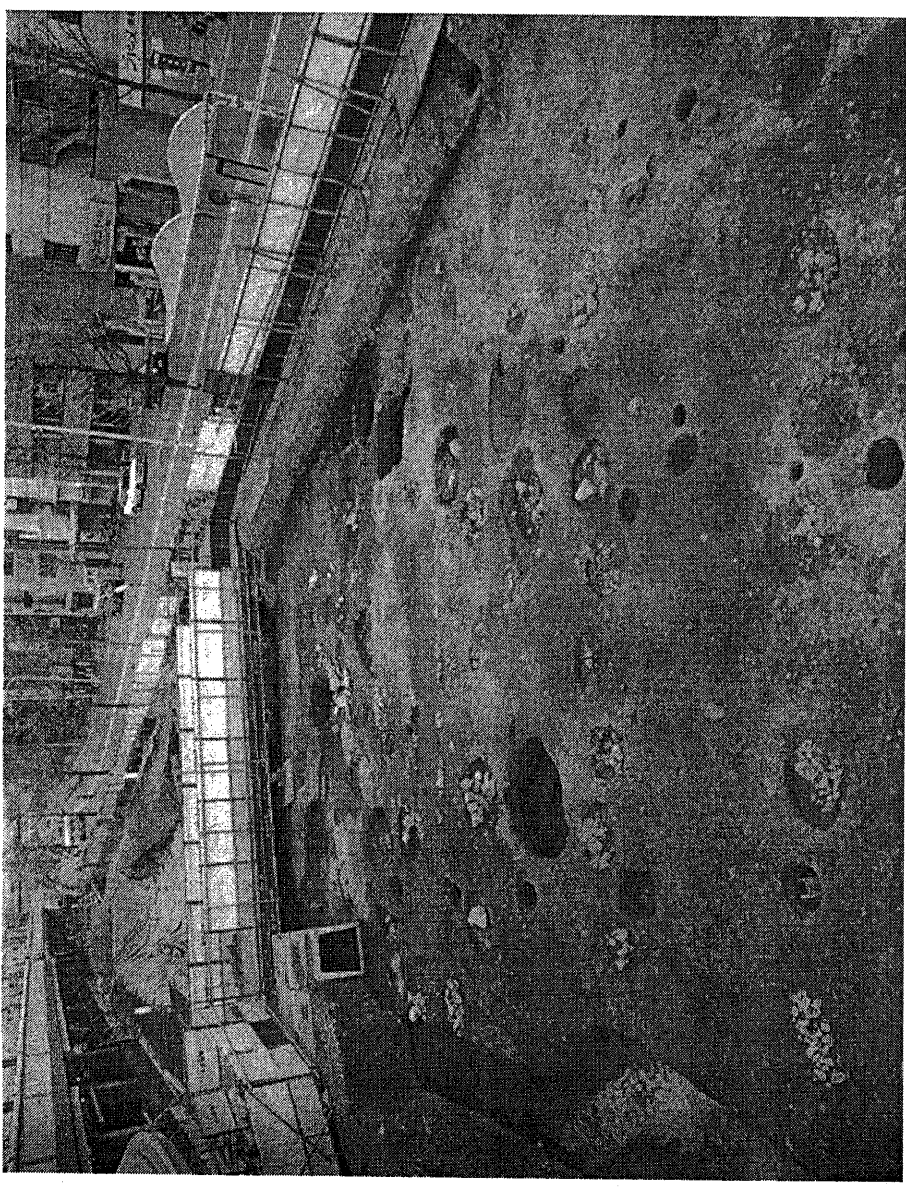


図 16 中門廊（東から）図 3-23



図 17 雨落溝・遣水（南西から）図 3-23

4 法金剛院の復元

法金剛院の伽藍と庭園の復元については、森蘊氏と清水擴氏の論文の中で、復元図が示されている。今回は、両氏の復元を踏まえ、調査成果を加えた推定復元図を掲載した。

法金剛院の寺域は、北は近衛大路西延長、南は春日小路西延長、東は西京極大路に面した、南北3町、東西2町の規模である。園池は五位山の南麓の裾野に広がり、南へ向かって東御所と西御堂の辺りで縋れてから南へ広がり、東門と塔の辺りが最も広くなる。そして築山の北辺でおさまる。池の形状は瓢箪形で南北約150m、東西最大幅は140mと推定される。

西岸部は、下層にいずれも天安寺関連の建物跡や整地土が検出されており、この整地土の上に盛土して造成されている。洲浜は整地された基盤に玉石などを用いず、白砂を敷き詰めて緩やかな勾配に仕上げられているのが特徴である。

東岸部も砂を敷き、洲浜が造られているが、勾配は急に造られているのが特徴である。

池の水は、昭和初頃までは西ノ川から取り入れていたようである。しかし、滝へは五位山の北から東裾野に沿って取り入れたと考えられ、滝の北側には水路跡と思われるくぼみがある。

東門や塔の下層で流路が検出された。この流路は、西ノ川や宇多川の旧河道と考えられ、法金剛院の南方では池またや湿地（湿原）を呈していたと思われる。双ヶ岡東南麓は園池を造るために適した自然条件が整っていたことがうかがえる。

建物の配置は、中央の池を挟んで東には御所、北東に北斗堂が建つ。池の西には御堂（阿弥陀堂）、南側には塔と経蔵が東西に建つ。池の南には築山と築山の間に南御堂が建つ。三昧堂は五位山東裾で、その東向いに東御堂が建つ様子を復元した。それは、池を挟んで西側を西方浄土の場所、東側は生活の場所、五位山を含む山側は墓域の場所、それぞれが異なった3つの空間が設定されていると思われる。この様な状況から考えると、法金剛院は造営当初から園池を中心に伽藍配置を設計し、計画的に建物を造営していった寺院であると考えられる。

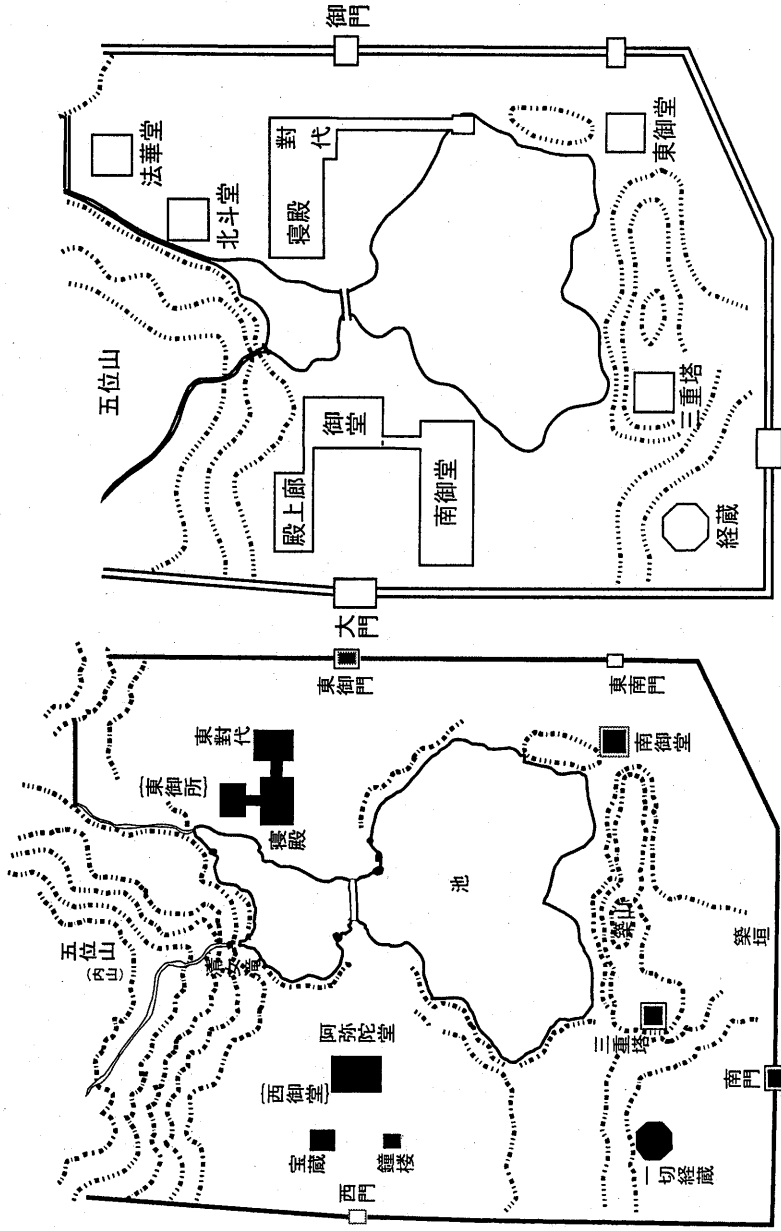


図 18 森氏の復元図

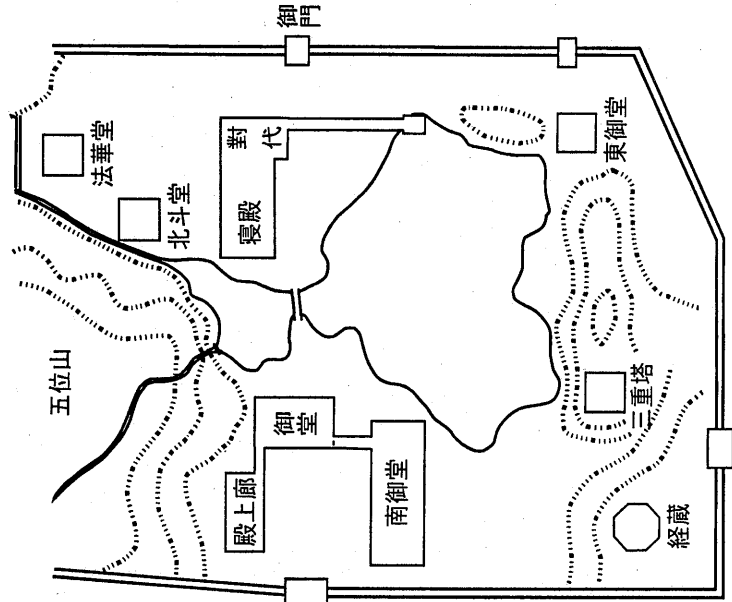


図 19 清水氏の復元図

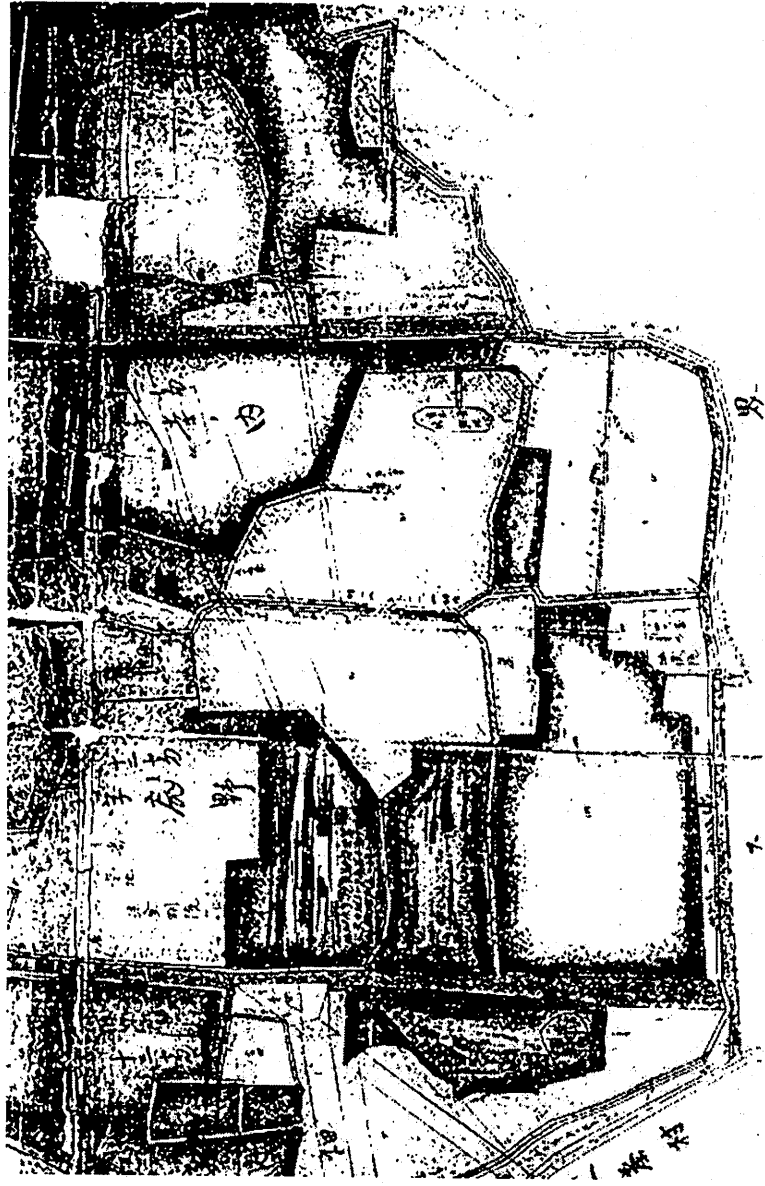


図 20 明治頃の花園地区の地籍図

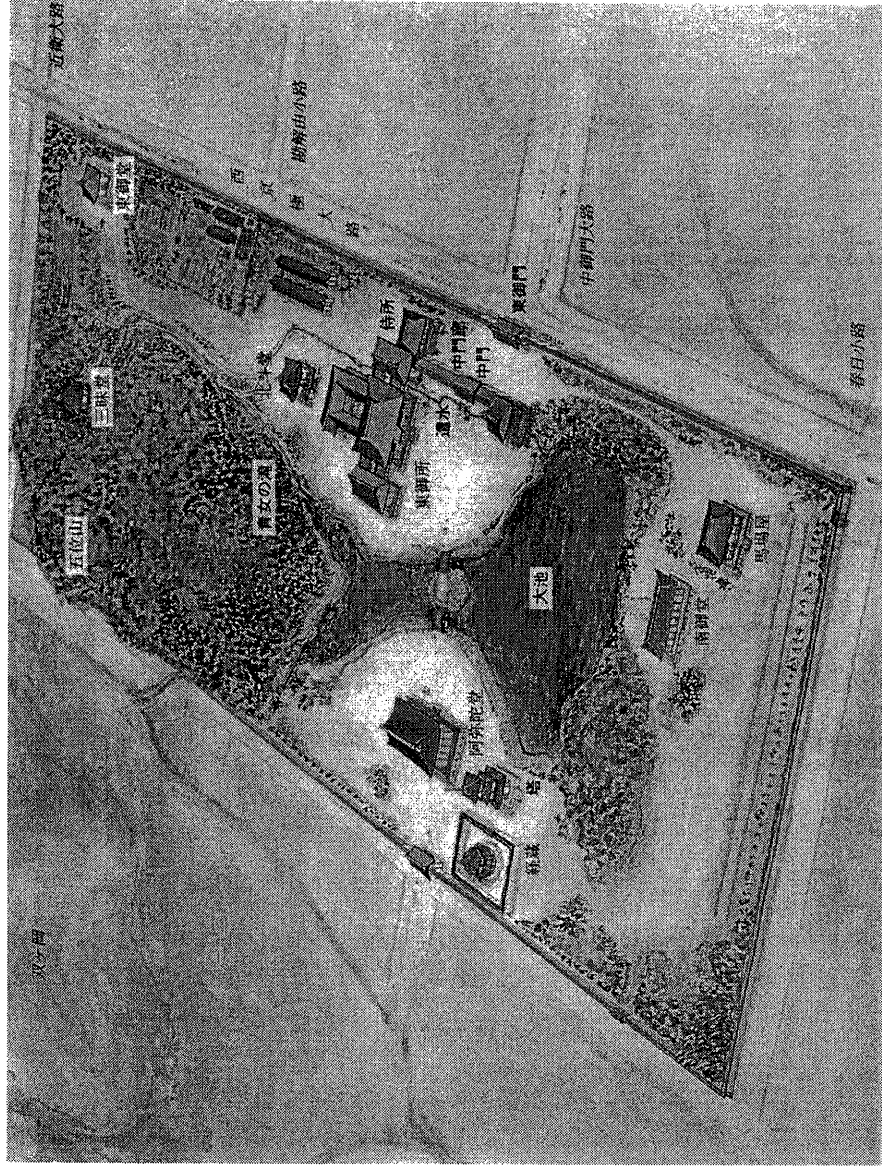


図 21 法金剛院復元図

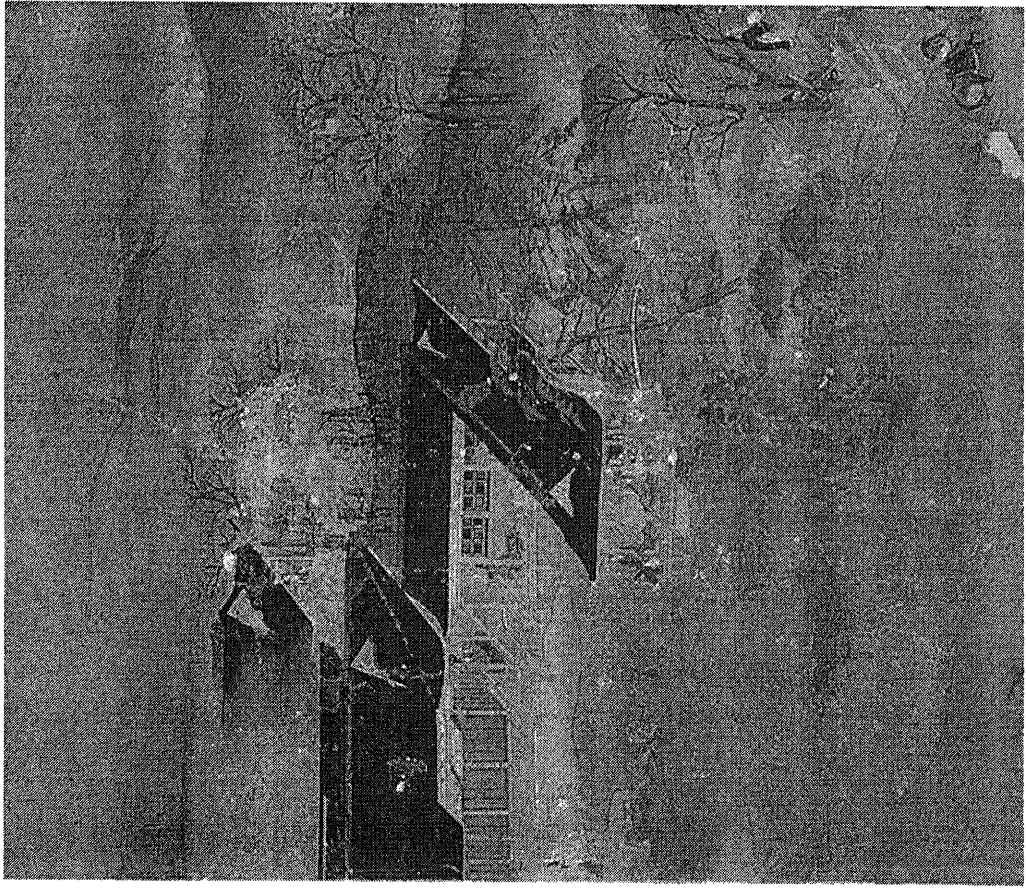


図 24 御所の様子 (神護寺 山水屏風)

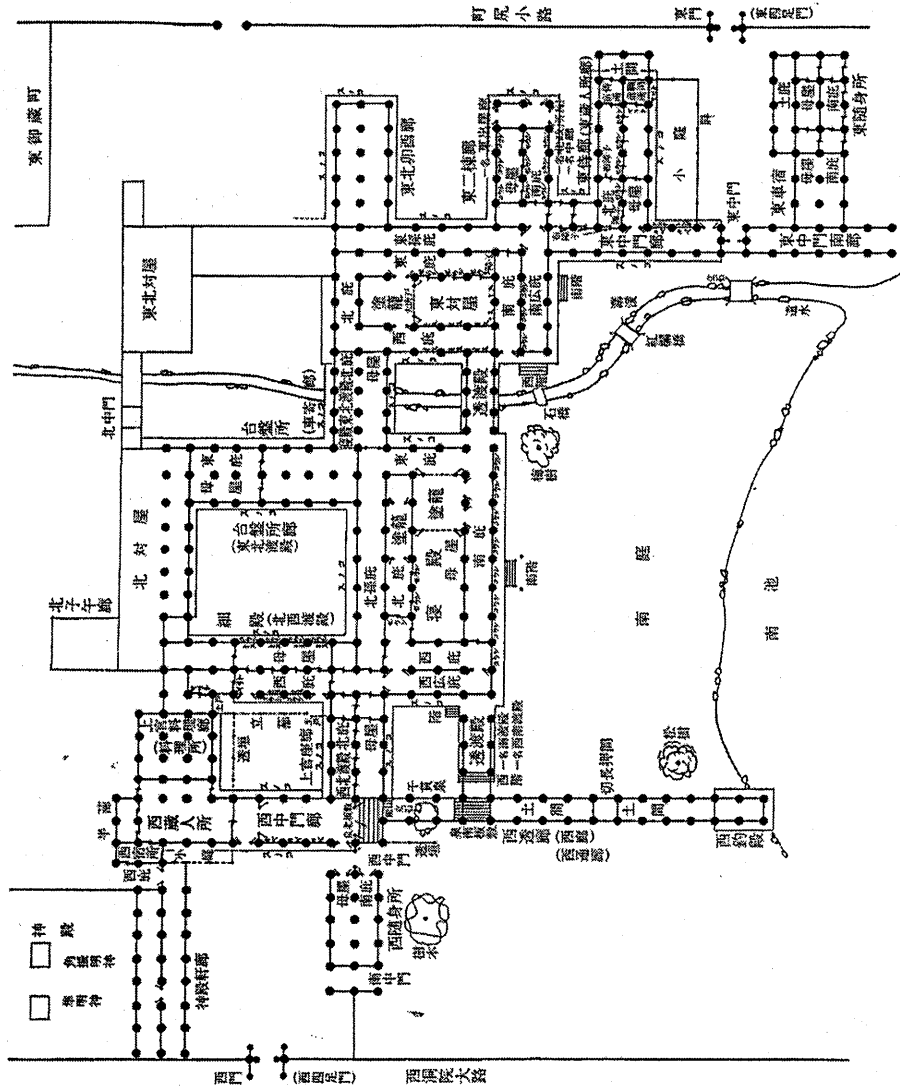
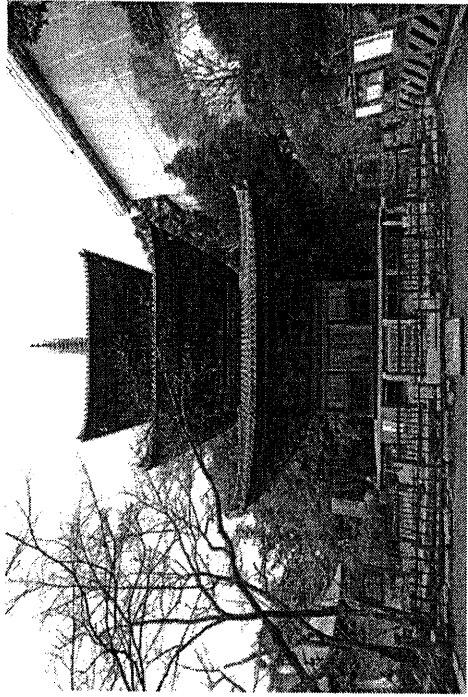


図 25 東三条殿 (寝殿造) 推定復元図



国宝 一乗寺三重塔

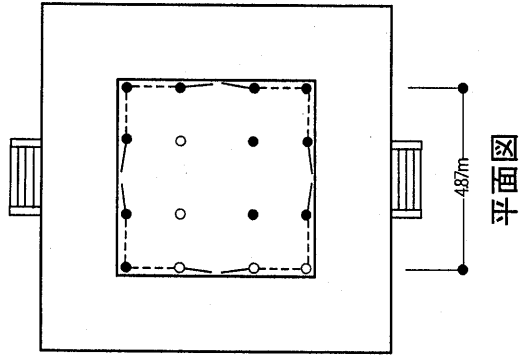
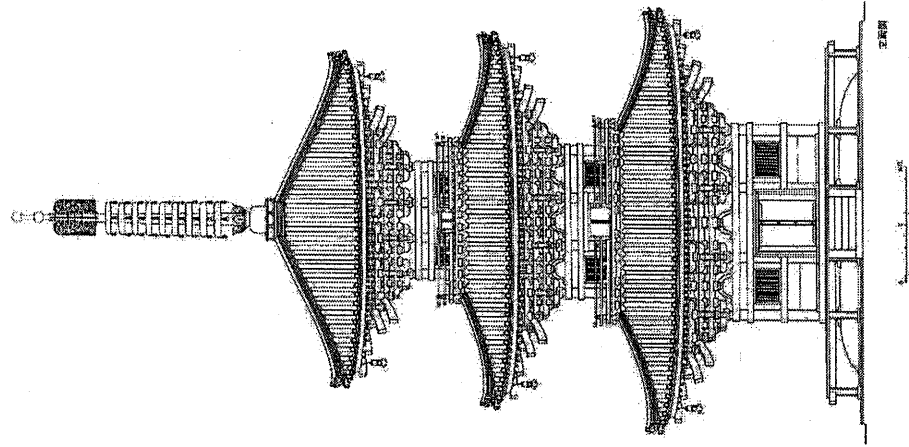


図 22 兵庫県 一乗寺の三重塔



立面図



図 23 年中行事絵巻